

JCA 中部支部 ニュースレター

日本コミュニケーション学会 中部
支部



2024年度 JCA 中部支部大会 @ 名城大学ナゴヤドーム前キャンパス



Japan Communication Association

前回のニュースレターの発行が2023年春でした。3年ぶりのレターとなります。ずいぶんと間が空き、申し訳ございませんでした。今回は、それ以降に行われた中部支部研究会、中部支部大会の様様をご寄稿いただいた所感とともにお伝えします。

また、コラム「歴代支部長の所感」は今回からの掲載です。初回は藤巻先生です。支部長を務めていただいた先生方に一言いただければと、やや見切り発車で計画を進めております。「自分も寄せてもいいよ！」と言っただけの歴代の中部支部長の先生方、ぜひよろしくお願いいたします。

もくじ

- 2022年度 中部支部大会の様様
- 2023年度 支部活動報告
- 2024年度 支部活動報告
- 2025年度 支部活動報告
- 会計報告(2023, 2024年度)
- お知らせ
- コラム: 歴代支部長を辿ろう

～藤巻 光浩 先生からひとこと～



2022年 大会の様

2022年度 中部支部大会

2023年3月4日(土)

13:00-17:30

実施方式：ハイブリッド

第一部『多言語化する日本』

第二部『自律学習と第二言語習得』

2022年度 中部支部大会の様

研究会は前号 NL12・13 合併号をご覧ください。

2022年度最後となる3月の研究会は対面・オンラインのハイブリッド、二部構成で開催しました。今回は「ことば」を中心に、「多言語社会とコミュニケーション」をテーマに発表者と参加者で活発な議論を展開してもらいたいとの思いからの開催でした。また、本支部大会では、大学院生の研究発表の機会を支援することを企画の狙いの一つにしました。それぞれのセッションで大学院生の研究発表もあり、大変有意義な時間となりました。

--- 日本コミュニケーション学会中部支部 HP 掲載の案内文章より ---

● 第一部『多言語化する日本』

司会：谷口紀仁（名古屋大学大学院 教育発達科学研究科）

発表1 「日本における司法通訳-コミュニケーション学の視点から」

発表者：毛利雅子（名古屋市立大学大学院 人間文化研究科）

発表2 「多文化共生社会に求められる教員養成の異文化理解教育のための試案」

発表者：ロレーナ・ロハス

（名古屋市立大学大学院 人間文化研究科博士前期課程修了）

ディスカッション

● 第二部『自律学習と第二言語習得』

司会：宮崎新（名城大学 外国語学部国際英語学科）

基調講演『自律的なことばの学習を目指して』

発表者：工藤節子（東海大学 日本語文化学系）

研究発表『日本人大学生英語学習者の「自律性」の発生と変容：留学が学習者に与える影響の観点から』

発表者：土屋加恵（南山大学大学院 人間文化研究科言語科学専攻修士課程）

ディスカッション

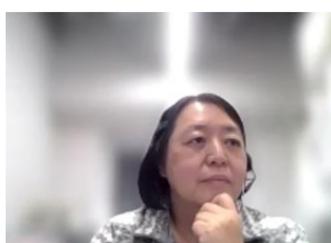
● 閉会の挨拶



オンラインは、事前の調整が肝心…

参加者からの寄稿

（中略）つまり「魚の釣り方」（＝技能）を身につければよいのではなく、「魚を得る」（＝ある言語に精通する）ことの社会的意味やイデオロギーまで思い至らしめよというメッセージを私たちに、いや、私に投げかけているわけです。



----- 梅田康子 先生（愛知大学）

工藤節子先生による大会第二部『自律学習と第二言語習得』の基調講演「自律的なことばの学習を目指して」から、大いに示唆を受けました。

ご講演は、4部分からなっていて、まずご自身の「自律学習との出会い」からスタートしました。日本語教育分野で「自律学習」という語が広がるきっかけとなったのは田中・斎藤（1993）ですが、工藤先生は国立国語研究所論文研修生時代(1989)に早くも契約学習の実践

研究をされていたそうです。当時の国研では先駆的な研修を展開していましたので、驚く一方であるほど納得します。2年後、私も研修生となり、工藤先生の背中を追いかけていくわけですが、当時「self-access」「learner-centered」「cognitive」といったキーワードを理解するのにものすごく時間を費やした記憶があります。こうした教育観や方法がまだ知られる前に書かれた工藤先生の論文をぜひどこかで入手し読んでみよと思います。

次に「自律学習とは何か」と題して、様々な用語・訳語、定義を紹介しつつ、先生のお考えに最も馴染んだ Benson(1997)から Learner Autonomy についてご説明いただきました。Autonomy を①技能 (Technical)、②心理 (Psychological)、③政治 (Political) の3つの視点からまとめたものですが、お話を伺って、先生は特に②と③を重視していらっしゃるように感じました。なぜかと言えば、講演ハンドアウトの最後が以下のように締め括られているからです。

「『魚』を与えるより『魚釣りの方法』を教えるほうが長い目で見て有効なのは確かですが……

しかし、その魚は確かにその人にとって必要なものか、魚を得ることはどのような意味を持つのか……ということを考えていくことは必要なことではないでしょうか。」

つまり「魚の釣り方」(=技能)を身につければよいのではなく、「魚を得る」(=ある言語に精通する)ことの社会的意味やイデオロギーまで思い至らしめよというメッセージを私たちに、いや、私に投げかけているわけです。ここで自身の教育実践を振り返らないわけにはいかない……そういう気持ちにさせる強いメッセージを感じました。

講演後半の「東海大学での実践と調査」及び「契約学習の授業 取り組みから見えてきたこと」は、②と③の体現でしょう。

東海大学の実践として、数々のカリキュラム改革(授業内容の可視化、CBI他)と学習環境整備(自学区の設定、台日プロジェクト型交流、E タンデム学習等)をご紹介いただきました。その一つ一つをじっくり詳しく聞きたいものの、時間は有限ですので、研究成果のまとめを拝読したいと思います。

最後の「契約学習の授業」は、2022年9月に始まったばかりなのに、レポートのKJ法分析と1月に実施した最新アンケートの統計結果まで見せていただきました。言語学習の範疇を超えた学習目標もあり、個人的には非常にエキサイティングでした。いずれなされるであろう成果発表を待ち、今はここまで止めておきます。

講演終了後の質疑応答では、理論と実践の両面に質問が寄せられ、活発に議論されました。

最後に、講演者の工藤節子先生に感謝申し上げます。また、非会員にもこのような機会をくださった中部支部の皆様にもお礼申し上げます。

梅田康子 (愛知大学)



自律的なことばの学習を目指して

日本コミュニケーション学会
2022年度中部支部大会

2023年3月4日
東海大学 日本語文化学系
工藤節子

参加者からの寄稿

大学院に入学して以来、対面の会場で発表したのは初めてでした。研究生生活がおよそ2年過ぎ、これまで学会では、他大学の先生や大学院生とお会いする機会はありませんでしたが、今回の研究会では、場の雰囲気やきき手の反応を直に感じながら発表することができました。

----- 土屋 加恵さん（南山大学大学院 人間文化研究科言語科学専攻修士課程/2022年時点での所属）

2022年度の終わりの3月4日（土）、愛知県淑徳大学星ヶ丘キャンパスで中部支部研究会が開催されました。数年、コロナ禍で多くの研究会がオンラインで行われていましたが、今回は対面・オンラインのハイブリッドで実施されました。この原稿では、修士研究の進捗を報告した発表内容に加えて、このような発表の場が大学院生の私にとってどのような学びになったのか、感想を共有させていただきたいと思います。

私は、外国語教育・第二言語習得の自律学習・学習者の自律性（LEARNER AUTONOMY）について研究をしています。学習者オートノミーの概念が生まれたヨーロッパでは、繰り返される戦争を回避できなかった反省から、人々の中にオートノミーを育む必要性があるという思想が生まれたといわれています（中田、2015）。MURASE（2012）は、日本人英語学習者のオートノミーの特徴について、外見の行動からは自律的と判断しづらいかもしいないが、実際は、自律性につながる考え方やモチベーションといった内的要因はしっかり持っているとして述べています。また、MURASE（2015）は、日本人大学生を対象に行ったアンケートデータをもとにして、学習者オートノミーを4つの要素に分類しました。目標設定や学習計画の作成など、自ら能動的に学習に関わる行為の TECHNICAL AUTONOMY、モチベーションの維持や感情のコントロールなど、学習過程を管理する能力である PSYCHOLOGICAL AUTONOMY。そして、教師主導の教室活動においても学習者が自らの意思決定を重視する意識や態度など、オートノミーの起源ともいえる学習者の主体的行為を POLITICAL-PHILOSOPHICAL AUTONOMY、他者と協力し学び合う姿勢や、生まれた地域の文化的影響がある中で自ら必要な学習を決めて遂行する能力を SOCIO-CULTURAL AUTONOMY としました。

このように学習者オートノミーには、多様な能力・行動が含まれます。先行研究を通して私が注目したのは、日本人学習者に特徴的なオートノミーはあるのかという点です。日本の外国語学習環境にはいくつかの点で制約があります。そのような制約を乗り越えるというところに、学習者の「自律性」は見られないのかと思いました。日本の大学には、学習者オートノミー育成を目標にして運営する「セルフアクセス学習センター（SALCS）」があります。また、異言語や異文化の学びを支援する留学プログラムがあり、外国語に対する主体的な学びを支える仕組みがいくつか存在します。こうした学びの場を利用す

る学習者は、程度の差はあるにせよ、自律的な学習を行ううえで不可欠な「主体性（LEARNER AGENCY）」（BENSON & COOKER, 2013）を発揮していると言えます。そこで今回の研究は、先行研究があまり見られなかった、留学と学習者オートノミーの関係性について調査することにしました。調査では、日本から留学した6人の日本人大学生を対象に、アンケート（自律性尺度スケール）、各30～40分程度の個人インタビュー（半構造化）、学習ログを実施しました。今回の研究会では、スウェーデンに留学した大学3年生の女子学生の留学体験について発表しましたので、その結果及び考察を述べていきたいと思っています。自律性の発生に関わる要因、自律性の変容過程について検討をしました。まず、自律性の発生に関わる要因として浮かび上がったのは、「留学中の学びに対する期待」「学びに対する好奇心」です。自律性の変容過程に関しては、学習に関する学習者の「選択」や「判断」の仕方に変化が見られました。1回目のインタビューでは、留学先の大学で何の授業を取るのか、授業以外の学習時間はどのように過ごすのかなどを決める際、本人の「現地の人、社会、言語に対する興味」が選択基準になっていました（PSYCHOLOGICAL AUTONOMY）。一方、2回目のインタビューでは、留学中に自分が本当にしたいことを、自分の性格、価値観、考え方など「自己理解」に基づいて判断している様子が見られました。そしてそれは、自ら自分に合った学習活動を選べるようになったこと（POLITICAL-PHILOSOPHICAL AUTONOMY）に加え、勉強方法の改善（TECHNICAL AUTONOMY）にもつながり、MURASE（2015）が指摘する、学習者オートノミーの4つの構成要素の相互関係性が見られました。これらの結果から、対象学生の自律性に関わる能力や行為は、留学経験を通して幅広くなり発達したと考えられます。今後は、他の調査対象学生の留学経験に関する、複数の語りを比較しながら、学習者オートノミーの発生・変容に関わる類似点や相違点を検討することが求められます。また、オートノミーの発達過程に見られる各要素の相互関係はどのようなものなのかについても詳しく調べる必要があります。

大学院に入学して以来、対面の会場で発表したのは初めてでした。研究生生活がおよそ2年過ぎ、これまで学会では、他大学の先生や大学院生とお会いする機会はありませんでしたが、今回の研究会では、場の雰囲気やきき手の反応を直に感じながら発表することができました。特に、

発表者としての質疑応答の難しさを体験し、先生がたから頂く質問を通して、自分の視野や知識がまだまだ限られていることを痛感しました。また、参加者からの様々な意見を通して、自分が、本調査における自律性の特徴に関する議論を個人差に落とし込もうとしていたことに気づくことができました。今後は、学習者の留学先の地域や文化が、自律性の発達・変容にどう影響するのかという点も踏まえて、幅広い視点で考察を深めていきたいと思っています。

この研究会を通して、修士研究に関する学びだけでなく、研究そのものの独自性に対する考え方や発展に対する意識を新たにすることができたと思います。積極的に質問をしていただいた先生や学生の方々に感謝いたします。このような発表の機会を与えていただき、また、今後の研究活動につながる学びや気づきを多くいただき、ありがとうございました。

引用文献

- BENSON, P., & COOKER, L. (2013). THE SOCIAL AND THE INDIVIDUAL IN APPLIED LINGUISTICS RESEARCH. IN P. BENSON & L. COOKER (EDS.), THE APPLIED LINGUISTICS INDIVIDUAL: SOCIOCULTURAL APPROACHES TO IDENTITY, AGENCY AND AUTONOMY (PP. 1-16). SHEFFIELD: EQUINOX.
- MURASE, F. (2012). LEARNER AUTONOMY IN ASIA: HOW ASIAN TEACHERS AND STUDENTS SEE THEMSELVES. IN T. MULLER, S. HERDER, J. ADAMSON, & P. S. BROWN (EDS.), INNOVATING EFL TEACHING IN ASIA (PP. 66-81). LONDON: PALGRAVE MACMILLAN.
- MURASE, F. (2015). MEASURING LANGUAGE LEARNER AUTONOMY: PROBLEMS AND POSSIBILITIES. IN C. J. EVERHARD & L. MURPHY (EDS.), ASSESSMENT AND AUTONOMY IN LANGUAGE LEARNING (PP. 35-63). UK: PALGRAVE MACMILLAN.

中田賀之（2015）『自分で学んでいける生徒を育てる－学習者オートノミーへの挑戦』ひつじ書房



2023年 研究会の様様

2023 年度 中部支部研究会

2023年9月30(土)
15:00-17:30

実施方式：ハイブリッド

パネルディスカッション
「文化」から考える団塊世代

2023 年度 支部活動報告

<パネル概要>

文化の研究対象は、主に若者や子どもが主流で、中高年の対象化、さらには長いライフコースを見据えた研究焦点化は希薄である。本パネルは、約1,200万人が生まれ、その人生が戦後史と重なる団塊世代(1946~1950年生まれ)の「文化」の研究の可能性を議論する。問題提起者らは、共同研究成果である著書『1970年代文化論』(青弓社、2022年)の執筆などを通して、団塊世代の「文化」について、ライフコース、戦後史から考える学術的および社会的重要性を見出した。本パネルは、1960年代、70年代に若者として人生を過ごし、現在は後期高齢者である団塊世代の「文化」の過去と現在を考える。

----- 日本コミュニケーション学会中部支部 HP 掲載の案内文章より

- 司会：毛利 雅子 (名古屋市立大学大学院 人間文化研究科)
- 問題提起者：日高 勝之 (立命館大学)、藤巻 光浩 (フェリス学院大学)
- レスポンド(討論者)：埴 幸枝 (成城大学)

スケジュール

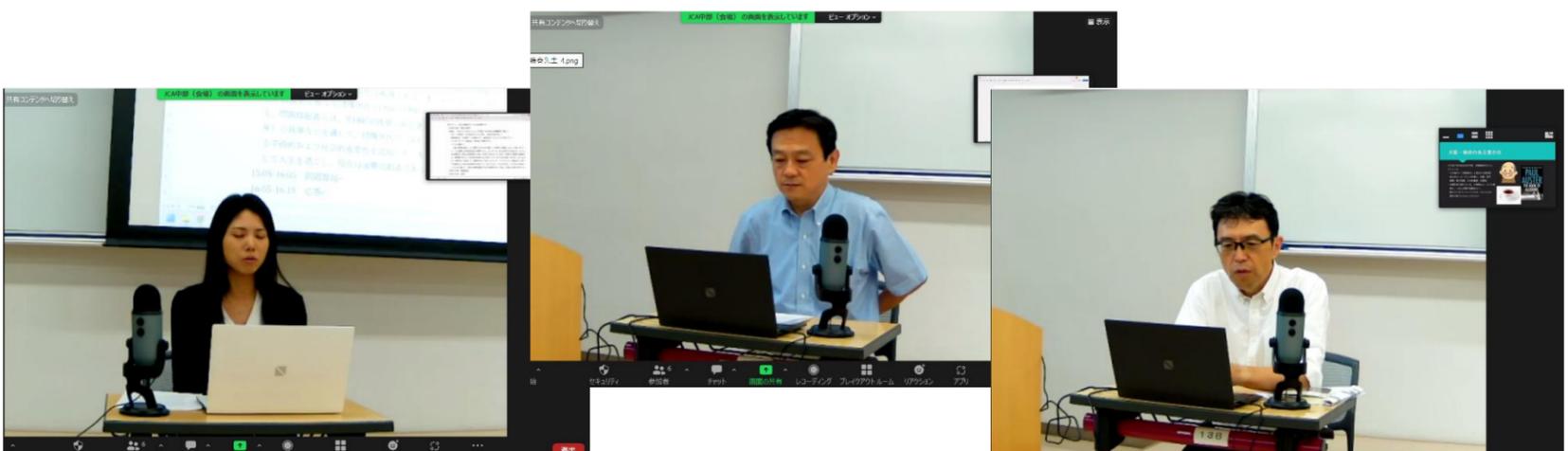
- 15:05-16:05 問題提起
- 16:05-16:15 応答
- 16:15-16:25 休憩
- 16:25-17:00 ディスカッション
- 17:00 閉会の挨拶
- 17:30 懇親会(要申込)



この回は問題提起をしてくださった日高先生のご著書を拝読の上、参加しました。

<https://www.seikyusha.co.jp/bd/isbn/9784787235084/>

Web から見た様子





2023年 大会の様

2023年度 中部支部大会

2024年3月9日(土)

14:00-16:20

実施方式：オンライン

2023年 中部支部大会の様

今回は「研究休暇」をテーマに、現在、実際に米国に研究休暇中の森泉先生と今井先生にご発表頂きます。ご発表では、研究休暇先の選定の仕方から、研究休暇中の過ごし方、受入機関での研究の進め方、現在のアメリカの物価高や円安が研究や生活に与える影響など、最新の米国事情を踏まえて研究休暇の実情をお話頂きます。

--- 日本コミュニケーション学会中部支部 HP 掲載の案内文章より

- 14:00 開会の挨拶
- 14:05 - 14:35 発表①
 - タイトル：サバティカルのリアル
 - 発表者：今井 達也（南山大学 外国語学部英米学科）
 - 滞在先：米国 テキサス大学オースティン校コミュニケーション学部（テキサス州オースティン）
- 14:35 - 15:05 ディスカッション
- 15:05 - 15:20 休憩
- 15:20 - 15:50 発表②
 - タイトル：アイデンティティ理論と研究実践の変容-研究休暇からの学び-
 - 発表者：森泉 哲（南山大学 国際教養学部国際教養学科）
 - 滞在先：米国 ワシントン大学心理学科（ワシントン州シアトル）
- 15:50 - 16:20 ディスカッション
- 16:20 閉会の挨拶

この回は、全員オンラインでした。

発表者からの寄稿



JCA 中部支部での発表を終えて

----- 今井達也 先生（南山大学）

JCA 中部支部の皆様のおかげで、発表の機会を得られましたこと、まず感謝の気持ちを述べさせていただきます。この機会のお陰で、一度、長いサバティカルを俯瞰し、自分の進むべき方向性について整理出きた気がしています。発表の内容はサバティカルにおける実践的な内容に振り切っていたため、ここではもう少し自分の研究について簡単にまとめさせていただきますと幸いです。今回のサバティカルで集中して取り組みたい研究課題としては、ここ数年進めてきた「感謝の

表現」に関する研究を、より深めていくことにあります。大きな視点では、私は対人コミュニケーションにおける「受容」の効果に興味があります。その効果について検討するために、以前は自己開示の機能について、留学生や恋愛のカップルを対象に研究をしていました。それなりに研究業績としての結果を出すことはできましたが、自分の中で納得感のあるものとは言えず、その理由の1つに、「受容感」や「関係性の満足感」などのキーコンセプトの相関関係を見ていたことにより

す。因果関係を間接的に検討するような統計的手法はいくつかありますが（Structural Equation Modeling 等）、やはり因果関係を調査するためには実験的手法が欠かせないことをずっと感じていました。例えば、確かに恋愛カップルにおいて自己開示は関係性の満足度と関連していますが（Imai et al., 2021）、その因果関係は分からないままです。当然、理論的な根拠に基づき因果関係を推測することはしますが、そこに信頼できるエビデンスがないと言えます。

そこで私が注目したのが感謝表現の研究でした。先行研究（GRANT & GINO, 2010）によると、感謝の表現を受け取った人は、自分の価値を肯定的に捉えることができる、という結果が示されており、ここに日本の文脈（感謝をする際に、謝罪表現を使うことがある）を付け加えることで、オリジナリティーを出せないかと考えました。なおかつ、感謝の表現を実験的に操作し、感謝の表現を受け取るグループと、そうでないグループに分けることで、感謝の表現の効果の因果関係を検討できるのでは、と考えました。つまり、これまでの相関関係を検討する研究から距離を置き、なおかつ受容の効果が期待できる感謝の表現に着目することは、ある意味必然だったのかも知れないと考えています。結果として、日本人を被験者とした研究でいくつかの論文を出版することができ（IMAI, 2022; IMAI, 2023）、ある程度の手応えを感じていました。これまでの研究結果を簡単にまとめると、感謝をするべき際に、感謝をし忘れたり、謝罪の表現だけで済ませたり（お忙しいところ、ごめんなさい等）すると、相手に対してネガティブな印象を持たれるだけでなく、相手が今後助けてあげようと思わなくなったり、相手が自分自身をポジティブに感じる機会を失う（「せっかく良いことをしてあげたのに、感謝もしてもらえないということは、自

分は社会的価値が低いのでは」と感じる）ことが分かりました。当然、これらの研究にも限界が数多くあることが分かりました。出版前のレビューとのやり取りでは「仮定のやりとりで得られた結果で、実践的な貢献を検討することはできないのでは」といった意見や「日本人だけのサンプルで得られた結果だけでなく、他の国の人とのデータで比較した方が良い」といった意見がありました。しかし、ここで研究会の中で話したこととつながるのですが、日本における研究環境では、なかなか踏み込んだ研究は難しいのでは、と考えています。例えば、実際に被験者を実験室に呼び、そこで会話をしてもらうとなると、1つの論文を出版するのに、最低でも2年はかかるのではと思います（お金と手間も）。他の国の人のデータを揃えようと思うと、コラボレーションをするなり、お金をもっとかけるなり、と新たな壁が立ちます。上記のような限界に対して、きちんと取り組んでいる素晴らしい研究者の方がたくさんいらっしゃることも承知しているのですが、やはりある程度コンスタントに研究業績を積み上げるには（そして同時に心身の健康を保つには）、自分なりの工夫が必要であると考えています。これも研究会で述べたことですが、私はサバティカルという環境以上に、この期間で得られた「時間」に価値があると考えています。所属している南山大学では大変良くしていただき、素晴らしい環境を整えてもらっていました。しかし、当然所属メンバーとしてのコミットメントも求められており、それをやらずに研究を優先するという考えにはなれません。教育者として学生のニーズに応えることも手を抜けない状況です。ですから、このサバティカルでいただいた「時間」を有効活用し、自分の研究活動の限界をしっかりと見極め、その限界を克服するために手持ちの武器でどう戦えるのか、をしっかりと考えていきたいと思っています。

最後になりますが、中部支部の先生方をはじめ、ご迷惑をおかけしている南山大学の皆様に、心から感謝申し上げます。特に宮崎先生には大変お世話になっています。どうもありがとうございます。

文献

GRANT, A. M., & GINO, F. (2010). A LITTLE THANKS GOES A LONG WAY: EXPLAINING WHY GRATITUDE EXPRESSIONS MOTIVATE PROSOCIAL BEHAVIOR. *JOURNAL OF PERSONALITY AND SOCIAL PSYCHOLOGY*, 98(6), 946-955. [HTTPS://DOI.ORG/10.1037/A0017935](https://doi.org/10.1037/A0017935)

IMAI, T. (2022). IS "THANK YOU" EFFECTIVE EVEN IN JAPAN WHERE "SORRY" MAY BE PREFERRED? TOWARD EXTENDING THE FIND-REMINDE-AND-BIND THEORY. *ASIAN JOURNAL OF SOCIAL PSYCHOLOGY*, 25(4), 762-772. [HTTPS://DOI.ORG/10.1111/AJSP.12532](https://doi.org/10.1111/AJSP.12532)

IMAI, T. (2023). EXPLORING HOW RECEIVED GRATITUDE AND APOLOGIES MEET A BENEFACTOR'S PSYCHOLOGICAL NEEDS OF FACE AND COMPETENCE. *INTERPERSONA: AN INTERNATIONAL JOURNAL ON PERSONAL RELATIONSHIPS*, 17(2), 252-272

IMAI, T., TANIGUCHI, E., & UMEMURA, T. (2021). RELATIONAL UNCERTAINTY AND RELATIONSHIP SATISFACTION IN A ROMANTIC RELATIONSHIP: SELF-DISCLOSURE AS A MODERATOR AND A MEDIATOR. *CURRENT PSYCHOLOGY*. [HTTPS://DOI.ORG/10.1007/S12144-021-01478-0](https://doi.org/10.1007/S12144-021-01478-0)



2024年 研究会の様様@名城大学ナゴヤドーム前キャンパス・DW207（西館2階 レセプションホール）

2024年度 中部支部研究会

2025年3月16日（日）
13:00～17:00

会場：名城大学ナゴヤドーム前キャンパス DW207

実施方式： 対面

2024年 中部支部研究会の様様

スケジュール

- **13:00** 開会の挨拶
 - **13:05 - 14:35 セッション1（90分）**
コミュニケーション学を教える中からの気づき
『改訂版 グローバル社会のコミュニケーション学入門』の執筆者・編集者を迎えて
登壇者：佐藤良子（内田良子）、田島慎朗、平田亜紀、福本明子、藤巻光浩、
宮崎 新、宮脇かおり、森泉 哲、森脇尊志（敬称略）
14:35 - 14:50 休憩（15分）
14:50 - 15:30 ディスカッション（40分）
15:30 - 15:40 休憩（10分）
 - **15:40 - 17:00 セッション2（80分）：研究発表**
 - ① タイトル：日本におけるスポーツ通訳:需要と課題
発表者：松見誌野（名古屋外国語大学言語教育開発センター、
名古屋市立大学人間文化研究科博士後期課程）
 - ② タイトル：幼少期に言語仲介を担った人々のライフストーリー
—南米につながる第2世代を対象に—
発表者：ロハス・ロレーナ（南山大学スペイン・ラテンアメリカ学科）
 - ③ タイトル：CLD 児を対象とした地域日本語教室における対話実践の可能性
発表者：矢島清香（名古屋大学学生支援本部学生相談センター／
国際本部グローバル・エンゲージメントセンター）
- 17:00** 閉会の挨拶



<https://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-8234-1260-8.htm>



2025 年 研究会の様様

2025 年度 中部支部 研究会

日時：2025 年 9 月 27 日（土）
13:00-17:30

会場：名城大学ナゴヤドーム前キャンパス DW207

実施方式：ハイブリッド

2025 年 中部支部研究会の様様

テーマ：「領域横断的な交流を目指して：これまでの研究の流れと今後の展望」

目的：異文化交流が盛んになる一方で、コミュニケーション研究者や学生の交流がなかなか進んでいない現状に一石投じるのが今回の支部研究会の目的です。中部支部の活動から足が遠のいてしまっていた先生方、まだ関わったことのない院生、学部生のみなさんを広く歓迎します。異なる領域の研究テーマで、5 名の研究者の発表と共に領域横断的な交流の場作りを目指します。

--- 日本コミュニケーション学会中部支部 HP 掲載の案内文章より

プログラム

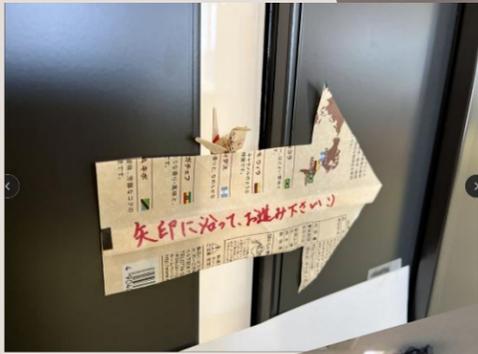
- **13:00 開会**
- **セッション 1：研究発表（13:00-15:10）**
 - 13:00-13:30 友池梨紗（愛知淑徳大学 グローバル・コミュニケーション学部）
「結婚相談所のコンシェルジュとの対話が婚活支援サービス利用者の婚活活動に与える影響」
 - 13:30-14:00 中村文人（愛知淑徳大学 グローバル・コミュニケーション学部）
「現代の国内社会の安定性とマス・メディアの役割に関する考察－ Watchdog Journalism の観点から－」
 - 14:00-14:30 榎菜佑保（愛知淑徳大学 グローバル・コミュニケーション学部）
「英語教育を通して、どのように学習者の感情表現スキルと自己理解の向上を促進させられるか」
 - 14:30-14:40 休憩
 - 14:40-15:10 全体質疑応答
 - 15:10-15:50 休憩&交流（Tea Time & Mingling）
- **セッション 2：研究発表（15:50-17:20）**
 - 15:50-16:20 佐倉真盛（名古屋大学大学院 教育発達科学研究科）
「Mediated Contact Intervention for Autism Stigma: The Power of Music」
 - 16:20-16:50 河村まい香（明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科）
「日本国内の企業における上司-部下関係の変容プロセス－コンフリクトの調整方法に着目した質的分析－」
 - 16:50-17:20 休憩&全体質疑応答
- **17:30 閉会**



愛知淑徳大学の先生方



宮崎先生のところの学生さんにお手伝いいただきました（感謝！）



2025年 中部支部研究会の様相



おしらせ、連絡ほか

日本コミュニケーション学会 中部支部

支部活動

日本コミュニケーション学会中部支部では対面の大切さを改めて大切にしつつ、オンラインでもご参加いただけるよう運営委員が尽力しております。また、若手や大学院生の発表と交流の場となればと思ひからも質疑応答に時間を取った会の活動をしております。お知り合いの方（もちろんご本人でも！）で、ご関心のある方はぜひご連絡ください。お待ちしております。

支部長より

あっという間に 2026 年を迎えることとなりました。衝撃的なニュースによる幕開けとなりましたが、世界情勢の変化におけるコミュニケーションを見つめる機会ともなりそうな予感です。さて、私の支部長としての任期も終わりとなります。これまで 2 期 4 年、会員の皆さまには大変お世話になりました。今後は一会員として、支部活動に参加したいと考えております。これまで本当にありがとうございました。（名古屋市立大学 毛利 雅子）

編集後記

この度は、お時間を割いてお手に取っていただき感謝申し上げます。私事ですが、本務校が代わり、忙しい日々を送っておりましたらすっかり JCA 中部支部の仕事がおろそかになっており、皆様に NL をお届けすることが遅くなり、多大なご迷惑をおかけして申し訳ございません。この場を借りてお詫び申し上げます。内容につきましては、今回は写真を多く入れることで少しでも会場の雰囲気をお届けできればと思ひました。楽しんでいただけたら、ぜひ、次回は会場でお会いしたく存じます。（平田 亜紀）

NL14・15・16 合併号をお届けいたします。年に一度に発行予定の NL ですが、久々の発行となってしまいましたことを深くお詫びいたします。NL は久々ですが、中部支部の活動は毎年、春・夏に精力的に行っております。近年では、他の支部の先生方やテーマに興味のある非会員の方々、院生、学部生のみなさんにご参加いただいております。NL からその熱気をお届けできたかと思っております。また、コロナ禍をきっかけに 2021 年以降オンラインやハイブリットでの支部の活動が可能となり、国内だけでなく、アメリカや台湾とリアルタイムで繋げることができ、海外の研究者との交流も可能となりました。中部支部という場が、学び、語り、つながる場になっていれば幸いです。最後に、ご寄稿いただきました先生方、学生のみなさんにはご寄稿から掲載まで時間がかかってしまいましたことをお詫びいたします。ご寄稿いただきましたことを深く感謝いたします。（佐藤 良子（内田 良子））

コラム

歴代支部長を辿ろう

～藤巻 光浩 先生からひとこと～

私が支部長を拝命したのは、14 年 6 月から 18 年 5 月までの 4 年間でした。前支部長の福本先生が盛り上げてくださった支部活動を維持させてゆくの目標でした。支部活動は、敷居を限りなく低くして、効率よく学ぶ場であること、そして研究上何らかの得

をするしかけが必要だと考えました。勉強会で学び合う気軽さ、その内容を支部大会につなげる勢い、その成果をニュースレターに掲載する力技、そしてそれらを科研応募に結び付けるという離れ業。気がついたら、

いつも支部活動に集まるメンバーで、コミュニケーション学の教科書を書いていました。支部活動とは、みなさんが学ぶことができる場作りであるという認識が大事であることを実感しました。

藤巻光浩（フェリス女学院大学）



中部支部メンバー（2025 年 12 月現在）

支部長 毛利雅子（名古屋市立大学）；運営委員（企画）宮崎新（名城大学）；運営委員（広報）佐藤良子（東海大学、台湾）；平田亜紀（愛知医科大学）；運営委員（会計）福本明子（愛知淑徳大学）；運営委員（会計監査）森泉哲（南山大学）

2026 年度より新メンバーが加わります！

今井達也（南山大学）；友池梨紗（愛知淑徳大学）；中村文人（愛知淑徳大学）

連絡先

毛利 (mouri <アット> hum.nagoya-cu.ac.jp) まで お願いします。